

平成 27 年度 学校法人皇學館・篠田学術振興基金助成研究

近現代日本における皇室の福祉事業に関する基礎的研究 ニューズレター



平成 27 年度 第 1 回研究会
(皇學館大学 現代日本社会学部共同研究室)

発行にあたって

皇學館大学篠田学術振興基金の助成を受けた研究「近現代日本における皇室の福祉事業に関する基礎的研究」が 3 年目を迎えた。この間の活動の一端を公表するために、

研究代表者 新田 均

この度、ニューズレターを発行することになった。これを機会に、この研究に一人でも多くの方が注目してくださり、その意義を理解してくだされれば幸いである。

本研究の目的と研究計画

本研究は、日本の近代以降における福祉の発展・展開を考究する上で、皇室の福祉事業に焦点をあて、その意義を明らかにすることを目的とし、現在に続く福祉事業の系譜を検証するものである。

我が国の社会福祉史を紐解く時、奈良時代の光明皇后による悲田院・施薬院の設置などに見られるように皇室が慈善活動に深く関与されてきた歴史がある。

こうした活動の系譜は、日本が近代を迎え、欧米の福祉活動との新たな出会いのなかで、どのように展開が図ら

れ、近代日本の福祉事業のなかで位置を占めてきたのかを理解することは、日本の福祉文化の特色を把握する上でも重要な問題であるといえよう。

本研究が目指すゴールは、皇室の福祉事業にかかる研究資料の把握と資料情報の整理を行い、その研究分析枠を明らかにするとともに、皇室と民間の福祉事業の関係、民間と宗教の福祉事業との関わり、そして皇室と宗教の福祉活動との関わりの三極構造において、日本の福祉文化を見直すための基礎研究を行うところにある。

目次

創刊号



発行にあたって……………新田 均 1
本研究の目的と研究計画
…………… 1



濃尾震災と恩賜金について
— 愛知県の史料から —
…………… 宮城 洋一郎 2



日本統治時代の朝鮮における
皇室の福祉事業の実践
— 1930 年の朝鮮風水害における
皇室の災害救恤金・下賜金記録と
新聞報道を事例に —
…………… 冬月 律 2



活動報告(1)平成26年度……………3
活動報告(2)平成27年度……………4
出張報告(1)平成26年度……………5
出張報告(2)平成27年度……………5
研究メンバー紹介……………6
編集後記……………6

濃尾震災と恩賜金について

—愛知県の史料から—

宮城 洋一郎^{1*}

平成 27(2015)年 8 月 3 日開催の今年度第 1 回研究会で報告した標題について、その要旨と若干のコメントを述べさせていただくこととしたい。

筆者は、これまでに本研究会のテーマに従って、各種研究会、学会等でいくつか報告してきた。特に濃尾震災の場合は、明治初年から継続されてきた災害時の恩賜金配付について、いくつかの着目すべき点を提起してきた。

今回は、愛知県の史料を中心に報告することとした。というのも、この震災の震源である岐阜県には恩賜金、義捐金等の史料が「岐阜県歴史資料館」等に所蔵されているが、「愛知県公文書館」には学校関係の救助史料が中心で、岐阜県とは異なる点があった。そうした中で、日比野元彦氏「愛知県下における濃尾地震史料について—行政文書にみる—」『愛知県史研究』第 6 号(平成 14(2002)年 3 月)で提示された史料に着目して、報告者なりに再検討したいと考えたのであった。

そこで、筆者の周囲の方々から関連する情報を集めた。とりわけ同朋大学教授で一宮市の真宗大谷派頓受寺住職である小島恵昭氏からの情報が重要な意味を持った。小島氏から、日比野氏は先年ご逝去されていたこと、同氏が紹介された史料を架蔵する一宮市博物館の学芸員の方を紹介して頂くことができた。これをもとに、平成 27(2015)年 7 月 1 日に同館を訪問し、史料の閲覧、写真撮影の許可を頂いた。

今回の報告はこの一宮市博物館架蔵の『明治二十四年大震災書類』(全 3 冊・一宮町役場)を中心に発表した。すでにこの史料の一部は『新編 一宮市史』資料編補遺四(昭和 58(1983)年)に採録されているが、恩賜金関連の史料は採録されていないところもあり、新たな発見もあった。それは、恩賜金配付に関して愛知県は独自の配分率を定めたが、それを町、村が継承し名簿を作成した。その名簿に「姓名校合」者の印が捺印されていたことである。同じように義捐金の名簿は作成されたが、校合者の印などはなかった。

このような名簿の例は、明治 38(1905)年東北地方大凶作にさいしても宮城県が作成しているが、こうした「校合」までは記されていない。おそらくは名簿作成に当たって、一宮町役場の担当者が配分率を計算しながら慎重に進めてきたのであろう。そうしたところに、恩賜金に対する緊張感が底流にあったことが理解できるだろう。

このように、わずかなことではあるが、史料の重みに出会った瞬間でもあった。こうした出会いは、いわば近代

史研究の醍醐味でもある。この醍醐味は、宮内庁公文書館での『恩賜録』の調査をはじめ幾多のところで味わうことができた。これこそ、本研究会とのありがたいご縁でもあった。ここに感謝の意を表したい。

日本統治時代の朝鮮における 皇室の福祉事業の実践

—1930 年の朝鮮風水害における皇室の
災害救恤金・下賜金記録と新聞報道を
事例に—

冬月 律^{2*}

去る 8 月 3 日に、本研究会の一環として、上記のテーマに報告を行った。具体的には、日本統治時代の朝鮮における皇室の福祉事業の展開を主に災害救恤金・下賜金を事例に、まずはその内容を表す内地動向を、時系列に整理したものを参照しつつ、災害状況と朝鮮総督府(本府)の対応を概観した。その後、甚大な災害をもたらした 1930(昭和 5)年の風水害に、皇室はどのように対応したか、また植民地における新聞ではどのように報じているのかを整理し、皇室の社会事業実践の一端を示した。以下、その概要を示したい。

朝鮮にとってもっとも恐れられていた災害は、洪水であったと言っても過言ではない。朝鮮では毎年 7、8 月に長雨があり、そのたびに多少の水害はあった。とりわけ 1925 年と 1930 年における暴雨・集中豪雨がもたらした人的・物的被害は尋常ならぬものであった。本報告では 1930 年の風水害に着目する。

まず、1930 年の風水害による朝鮮の被害状況については、『昭和五年朝鮮風水害誌』(朝鮮総督府、1931 年)の記録によれば、1930 年は 6 月下旬から南鮮地方に豪雨があり、7 月中旬にかけては朝鮮中部から北鮮地方に断続的に豪雨があり、さらに日本海に面する慶尚南北、江原、咸鏡南北の五道は強烈な暴風雨が襲来した。これにより河川の氾濫、土砂崩れ、高波などが各地に起きたと記されている。被害状況というと、災害による死亡者及び行方不明者は合わせて 1683 名にも達し、その状況について同誌では、「罹災民の窮状其の極に達し朝鮮未曾有の惨害を惹起するに至りたり」と述べられている。

このような甚大な被害に見舞われた朝鮮に対して、皇室では天皇皇后両陛下に代わり、侍徒であった海江田子爵を現地へ送り、被災地の視察とともに罹災者を見舞わせ、救恤金(新聞では天恩とも)として 3 万円を下賜さ

*1 種智院大学 特任教授

*2 モラロジー研究所道徳科学研究センター 研究員

れた。この災害救恤金は、直ちに関係各道に対し、伝達とともに、被害の程度に応じた額を配分していることが、恩賜録の記録や当時の新聞(『毎日申報』)記事からも確認することができた。

以上、近代の日本が植民地で展開した社会事業の研究が、主に政策として論じられる傾向にあるのに対して、本研究は、皇室における社会事業とその実践に焦点を当てている。そのような視座に立った本研究は、近代神道史で十分な研究対象とされてこなかった、神道の社会事業を考えるうえで意義のある試みであると考えられる。しかし、このような海外、とくに植民地における「支援」は、政治的側面・時代的背景などとの関係を完全に排除して論じることは難しいため、今後さらなる考察が必要であると考えられる。

活動報告(1) 平成 26 年度

第 1 回研究会

(平成 26 年 8 月 25 日(月)13:00~17:00

於 皇學館大学 現代日本社会学部共同研究室)

- ①【発表】山路克文「第二次世界大戦後の日本の社会事業の特質について:皇室の慈恵事業と社会事業の関係性について」
- ②【発表】宮城洋一郎「明治 24 年濃尾震災の救援活動と関係資料」
- ③【報告】岡本和真「宮内庁書陵部蔵『恩賜録』の入力状況について」
- ④今後の研究会の進め方について

第 2 回研究会

(平成 27 年 3 月 6 日(金))

10:00~12:00 濃尾震災関係施設見学会

13:00~17:00 研究会 伊奈波神社社務所

於 岐阜県岐阜市)

- ①【ゲストスピーカー】笈真理子氏(伊奈波神社社宝物館学芸員・元岐阜市歴史博物館学芸員)「濃尾大震災と岐阜」
- ②【発表】宮城洋一郎「濃尾大震災と災害支援」
- ③【報告】櫻井治男「宮城県立公文書館所蔵・明治 38 年東北凶作恩賜金配与に関する訴状」
- ④【報告】井上兼一「石井十次の社会事業についての理解」
- ⑤【特別報告】金田伊代「ターミナルケアにおける神職の可能性」

⑥【報告】櫻井治男「平成 26 年度活動報告と平成 27 年度科学研究費申請について」



伊奈波神社



伊奈波神社より市内を望む



研究会(伊奈波神社 社務所)

学会発表・参加

平成 26 年 11 月 1 日に鹿児島で行われた「第 30 回韓国日本近代学会」において、櫻井治男が研究発表の指定討論者を担い、宮城洋一郎が「明治期の災害救助:濃尾震災を事例として」と題して発表し、冬月律が研究発表・討議の通訳支援と「戦前の韓国における災害時恩賜金に関する報道」というテーマで、関根英行と打ち合わせを行った。



方舟館(石井十次資料館)

【石井十次(いしいじゅうじ)】
(慶応 1(1865)~大正 3(1914))
宮崎県出身、明治期を代表するキリスト教社会事業家で、孤児院の創設者

【石井十次資料館】
宮崎県児湯郡木城町大字椎木
644-1



石井十次先生開拓記念碑



石井十次墓地

活動報告(2) 平成 27 年度 第 1 回研究会

(平成 27 年 8 月 3 日(月)13:00~17:00)

於 皇學館大学 現代日本社会学部共同研究室

- ①【報告】新田均「平成 26 年度事業報告」
櫻井治男「平成 27 年度研究計画」
- ②【発表】宮城洋一郎「濃尾震災と恩賜金:愛知県の資料から」
- ③【発表】冬月律「皇室における利他的実践:恩賜・下賜金の支出状況からみた天皇制慈恵主義を事例に」
- ④【発表】櫻井治男「資料『震災に関する宗教道徳的観察』の紹介」
- ⑤【発表】渡邊真美「『女学雑誌』における女性像の規範について:昭憲皇太后の社会事業を題材として」
- ⑥【論文紹介】山路克文「近代日本における社会事業と皇室の役割について:連続・非連続の視点からみた戦後日本の社会福祉の特質」

「明治天皇北陵巡幸とその時代背景」

- ⑦【予告】韓国日本近代学会(平成 27 年 10 月 31 日九州大学)における研究発表募集について
- ⑧平成 28 年度以降の研究活動について

平成 27 年 8 月 4 日打ち合わせ会

- ①平成 27 年度第 1 回研究会まとめ
- ②年表作成について
- ③ニューズレターの発行について

学会発表・参加

平成 27 年 5 月 9 日に愛知県で行われた「社会事業史学会第 43 回大会」にて宮城洋一郎が「濃尾震災と恩賜金について」と題して研究発表を行った。

出張報告(1) 平成 26 年度

日程	場所	出張者	内容
平成 26 年 7 月 4～5 日	宮内庁書陵部宮内公文書館 (東京都)	宮城洋一郎	『恩賜録』明治 30～35 年の閲覧、撮影 (調査協力:神守昇一)
平成 26 年 8 月 5～6 日	岐阜県立歴史資料館 岐阜県立図書館 (岐阜県)	櫻井治男 宮城洋一郎 井上兼一	濃尾震災関係資料調査、撮影 (調査協力:魚岸一弥、岡本和真、荒井 寛臣、風間章一)
平成 26 年 10 月 31 日～ 11 月 2 日	鹿児島国際大学(鹿児島県) 石井十次資料館(宮崎県)	櫻井治男 宮城洋一郎 冬月律	第 30 回韓国日本近代学会参加、 情報交換、資料収集、撮影
平成 26 年 11 月 11～12 日	宮内庁書陵部宮内公文書館 (東京都)	櫻井治男 宮城洋一郎	『恩賜録』明治 35～45 年の閲覧、撮影 (調査協力:魚岸一弥、岡本和真)
平成 27 年 2 月 19～20 日	宮城県公文書館 (宮城県)	櫻井治男 宮城洋一郎	明治 38～39 年東北大凶作における 恩賜金資料調査



岡山孤児院募金箱(石井十次資料館)



韓国日本近代学会 懇親会(中央:関根英行会長)

出張報告(2) 平成 27 年度

日程	場所	出張者	内容
平成 27 年 5 月 9 日	愛知県立大学 長久手キャンパス (愛知県)	宮城洋一郎	社会事業史学会第 43 回 大会にて発表
平成 27 年 7 月 1 日	一宮博物館 (愛知県)	宮城洋一郎	濃尾震災と恩賜金関連 史料収集



濃尾震災横死群霊位供養碑(岐阜県岐阜市)

研究メンバー紹介

- 研究代表者 新田 均(皇學館大学現代日本社会学部 教授)
共同研究者 田浦 雅徳(皇學館大学文学部 教授)
共同研究者 鶴沼 憲晴(皇學館大学現代日本社会学部 教授)
共同研究者 山路 克文(皇學館大学現代日本社会学部 教授)
共同研究者 板井 正斉(皇學館大学教育開発センター 准教授)
共同研究者 井上 兼一(皇學館大学教育学部 准教授)
共同研究者 遠藤 慶太(皇學館大学研究開発推進センター 准教授)
研究協力者 櫻井 治男(皇學館大学文学部 特別教授)
研究協力者 宮城 洋一郎(種智院大学 特任教授・皇學館大学 名誉教授)
研究協力者 藤本 頼生(國學院大学神道文化学部 准教授)
研究協力者 小平 美香(学習院大学文学部 非常勤講師・天祖神社 禰宜 東京都)
研究協力者 岩瀬 真寿美(名古屋産業大学環境情報ビジネス学部 准教授)
研究協力者 関根 英行(嘉泉大学校人文学部 教授 大韓民国)
研究協力者 冬月 律(公益財団法人モロロジー研究所 研究員)
研究補助 魚岸 一弥(高瀬神社 出仕 富山県)
研究補助 岡本 和真(籠神社 出仕 京都府)
研究補助 金田 伊代(京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程)



【震災記念堂】

(国登録有形文化財・岐阜県岐阜市若宮町 2-10)
明治 24(1891)年 10 月 28 日の濃尾大震災による岐阜県下の犠牲者を弔うため、地元の国会議員天野若圓によって建立された。若圓が浄土真宗の僧侶であったことから、外観・内装は浄土真宗様式を基調としているが、宗派を超えた慰霊堂として造られている。震災被災者を追悼する建物としては我が国最初のものである。
(案内板より)

編集後記



このたび、「近現代日本における皇室の福祉事業に関する基礎的研究」のニューズレターを刊行する運びとなりました。今後は年に 2 回、9 月と 3 月に発行予定です。

福祉、歴史、宗教、神道、教育諸領域の研究者による共同研究の成果をお伝えしていきます。
(金田)



近現代日本における皇室の福祉事業に関する基礎的研究
ニューズレター
創刊号

平成 27 年 9 月 30 日発行

発行 皇學館大学

現代日本社会学部

新田 均研究室◎

〒516-8555

三重県伊勢市神田久志本町 1704

0596-22-0201(代)